

「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいている大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

令和十五年秋にむけて

お伊勢さんの第63回「式年遷宮」

令和七年から諸行事が開始に

伊勢の神宮では二十年に一度、すべての御殿を建て替へ、御神宝装束も新たに「式年遷宮」があります。令和六年の正月に、神宮大宮司さまが参内された折に、陛下から遷宮を取り進めることのお言葉があり、諸行事の予定を申し上げましたところ、四月にこのことを「御聴許」になったことが伝達されました。

これを受けて、神宮当局でご準備が具体的に開始され、平成七年からは最初の神事である「山口祭」「木本祭」さらに「御杣始祭」などの諸行事が齎行されることとなります。

この御遷宮は、国民国家の平穏を祈念される陛下の大御心を奉戴して、「国民総奉賛」により完遂されることとなります。

全国の神社関係者の力を合わせて「無双の大営」を立派に成し遂げたいものです。

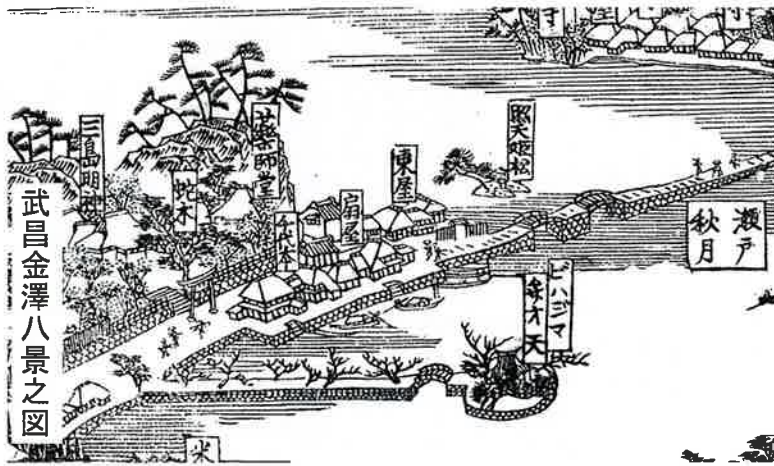
昭和の時代には第五十九回の式年遷宮が戦争のため四年間の遅延となりました。遷宮の予定通りの完遂は平和と繁栄の証しでもあります。皆様ともどもに奉賛活動に協力してゆきたく御願ひいたします。



遷宮諸行事がすすむと、木曾の山からの御用材を納める「お木曳き」行事があります。写真下は前回の行事に氏子一同で参加した際の記念品です。今回も参加を企画したいと存じます。

令和七年祭事暦

- 一月 一日 歳旦祭
- 鶏鳴神事
- 二月 二日 節分祭
- 二月 二三日 天長祭
- 三月 二〇日 春季大祭
- 祈年祭・合祀神例祭
- 四月 二九日 昭和祭
- 五月 十五日 例大祭
- 神社本廳献幣使参向
- 琵琶島弁天社へ神輿渡御
- 六月 三〇日 大祓式
- 大祓人形納め・茅の輪神事
- 七月 六日 天王祭出御祭
- 本社神輿御霊入
- 七月 八日 三つ目神楽
- 無形文化財湯立て神楽
- 七月 一三日 天王祭巡幸祭
- 天王神輿町内巡幸
- 七月 二〇日 手子神社例祭
- 九月 一日 浅間神社例祭
- 九月 一七日 熊野神社例祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一〇月 一二日 手子神社秋祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一一月 二三日 秋季大祭
- 新嘗祭
- 一二月 八日 歳の市
- 開運熊手授与
- 一二月 三二日 大祓式
- 大祓人形納め
- 毎月 一日 月次祭



瀬戸神社のご祭神は伊豆の三島明神を勧請したものとされますが、この三島明神は元は伊豆半島の先端に近い白浜に鎮座する伊古奈比咩命神社でありました。この神社に古くから伝はる縁起物語があり、「三宅記」といふ書物に記録されてゐます。おとぎ話のやうな奇想天外な筋書きの物語ですが次のやうなことが語られます。



昔、天竺のある国の王様に八人の妃があつた。最愛の妃は光生徳女であつたが、この妃には子がうまれなかつた。妃は薬師を念じて、自らの命に替へても子を授かることを祈り、立派な王子を生むことが出来たが、王子が幼いうちに亡くなつた。しまつた。やがて王子は美しい青年に成長するが、王様の後妻が王子に心を寄せたため、王様の勘気により王子は国を出ることになる。薬師の化身でもある王子は、

諸国を遍歴の後、東方に神々のすむ日本があることを知り、日本にやつて来た。

日本の国は、どこも神々がお住みで、住む場所がなかつたが、富士山の神が伊豆半島の先あたりが良いが、狭いやうだから自ら島を焼き出すのがよいと教へてくれた。

そこで眷属となつた若宮・劍御子・見目（それぞれ普賢菩薩・不動明王・龍神弁天の化身）の協力で伊豆の島々を焼き出してそこを住まひとし三島明神となつたといふのである。

瀬戸神社に「薬師堂」が建立されたことと、この縁起物語がどれだけ関係するかは明確ではありませんが、三島明神と「薬師」の関係を推察するひとつの材料ではありませう。

かうした神仏習合は、一般的には明治維新の「神仏分離」で解消されるのですが、瀬戸では安政五年（一八五九）に大火があり、隣接の東屋などとともに薬師堂も鐘楼も消失したとのことです。釣り鐘の銘文は松平定信編纂の「集古十種」といふ書物に記録されてゐます。

谷津町鎮座
浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まつた中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かつたと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭（近くの土日曜）には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年（一四六三）西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にも信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県社廳献幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年に屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行われました。社務所(淑月館)は令和大禮記念事業として令和二年三月に竣工しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれておます。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらっしゃいます。

「くすり」の効能と

「お守り」の効き目

神社のお守りには、「交通安全」「病氣平癒」「学業成就」などさまざまなものがあります。しかし、お守り袋の中身はどれも「瀬戸神社」のご祭神のお札です。ご祭神の御神徳を戴くための小さなお札が「御霊」として込められておます。薬品のように成分や配合の違いがあるものではありません。

「お守り」は持つておれば効くといふものではなく、効くのは持つひとの「いのり」にあります。

毎日、ご神前にまで足を運ばなくとも、自宅の神棚で手を合わせ祈るために「おふだ」をおまつりします。

さらに一日中行動をともしにして「いのり」を継続できるものとするために携帯できるのが「おまもり」です。

「いのり」の趣旨を明確にするために「お守り袋」の表面には「交通安全」「病氣平癒」「学業成就」など種類の文字が記載されますが、その文字に効能があるのではなく、お持ちになる方がそこに「いのり」を込めることに本当の意味があるのです。

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加えました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神樂が昔ながらの伝統を守って行はれます。

境内の洞窟にお祀りする竹生鳥弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されておます。

瀬戸神社 (〒三三六〇〇二七)

横浜市金沢区瀬戸十八一十四

(電話)〇四五七〇一一九九九二

(FAX)〇四五七〇一一九九九四

<http://www.setojinja.or.jp>